

ポストB R I C s 「V I S T A」の可能性

～ 2005 年から 2050 年までにドル換算 G D P は 28 倍 ～

2006年12月4日(月)

B R I C s 経済研究所 代表 門倉 貴史

E-mail: postbrics@yahoo.co.jp

～ 要 旨 ～

中長期的に高成長が期待できる有力新興国としてB R I C s が先進諸国の注目を集めているが、最近では、B R I C s 以外にも次世代の有力新興国として様々な国が台頭しつつある。そうした流れのなか、先進諸国の間では、新たな企業の進出先、株式の投資先としてポストB R I C s を模索する動きが広がってきた。

B R I C s の名付け親であるゴールドマン・サックスのチームは2005年12月にポストB R I C s として「ネクスト-11」を選定、バングラデシュ、エジプト、インドネシア、イラン、韓国、メキシコ、ナイジェリア、パキスタン、フィリピン、トルコ、ベトナムの11カ国を取り上げた。しかし、現状、ネクスト-11は玉石混淆となっており、各国の中長期的な成長力についてはよく見極めていく必要がある。

B R I C s 経済研究所は、新たにポストB R I C s の最有力候補グループとして「V I S T A」を提唱したい。「V I S T A」とは、ベトナム(Vietnam)、インドネシア(Indonesia)、南アフリカ(South Africa)、トルコ(Turkey)、アルゼンチン(Argentina)の英語の頭文字をつなげた造語だ。「眺め、遠望」などを表す英単語「V I S T A」にかけている。

「V I S T A」は、現在のB R I C s の高成長を支える5つの条件を基準として、5つの条件のうち4つ以上を兼ね備えている有力新興国から選定している。5つの条件は、豊富な天然資源、労働力の増加、外資の導入、政情の安定、そして購買力のある中産階級の台頭である。

V I S T A はB R I C s と比べると経済規模がまだまだ小さく、個別にみるとインフレや経常収支の赤字など解決すべき課題もあるが、エマージング諸国のなかでは将来の高成長が最も期待できるグループである。試みに、いくつかの前提条件をおいたうえで、V I S T A のG D P が将来的にどのように推移していくかシミュレーションしてみよう。ここでのG D P の大きさは米ドルで換算した名目ベースで評価することとし、人口が国際連合の推計人口(中位予測値)に沿って推移していく、各国の1人あたりG D P がロジスティック曲線に沿って推移していく(水準が低い段階では成長率が逡増し、水準が高くなると成長率が逡減する)、予測期間中にアジア通貨危機のような外生的なショックは発生しないことを前提とする。シミュレーションの結果によると、V I S T A の経済規模は2005年時点で9600億ドルにとどまっている。しかし、今後成長率が加速度的に高まり、2050年には26.8兆ドルに達する。2005年から2050年までの間にV I S T A の経済規模は28倍に膨らむ計算だ。

(ポストB R I C sとして有望視される「V I S T A」)

中長期的に高成長が期待できる有力新興国としてB R I C s (ブラジル、ロシア、インド、中国) 4カ国が日本をはじめとする先進諸国の注目を集めているが、最近では、B R I C s以外にも次世代の有力新興国として様々な国が台頭しつつある。購買力平価 (P P P) で換算した世界G D Pに占める新興国のシェアは、90年時点の40.3%から2005年には47.7%へと高まっており、まさに世界経済は「フラット化」しつつあるといえよう(図表1)。

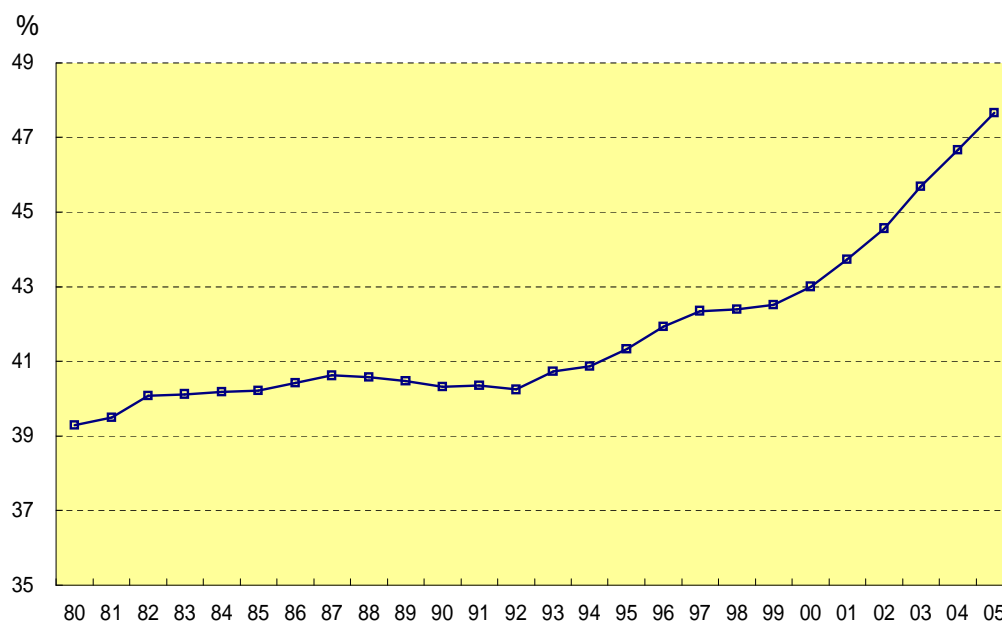
そうした流れのなか、先進諸国の間では、新たな企業の進出先、株式の投資先としてポストB R I C sを模索する動きが広がってきた。

B R I C sの名付け親であるゴールドマン・サックスのチームは2005年12月にポストB R I C sとして「ネクスト-11」を選定、バングラデシュ、エジプト、インドネシア、イラン、韓国、メキシコ、ナイジェリア、パキスタン、フィリピン、トルコ、ベトナムの11カ国を取り上げた。しかし、ネクスト-11は玉石混淆となっており、各国の中長期的な成長力についてはよく見極めていく必要があるのではないか。

B R I C s 経済研究所は、新たにポストB R I C sの最有力候補グループとして「V I S T A」(ビスタと発音)を提唱したい。

「V I S T A」とは、ベトナム (Vietnam)、インドネシア (Indonesia)、南アフリカ (South Africa)、トルコ (Turkey)、アルゼンチン (Argentina) の英語の頭文字をつなげた造語だ。「眺め、遠望」などを表す英単語「V I S T A」にかけている。

図表1 世界G D P (購買力平価換算) に占める新興国のシェアの推移



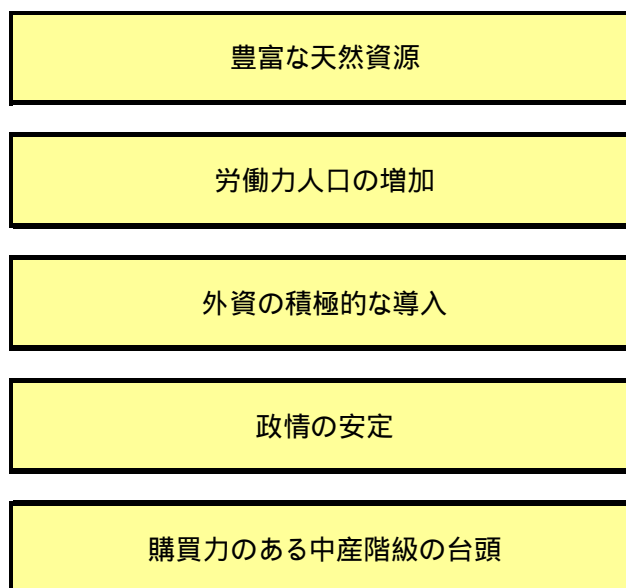
(出所) I M F 資料に基づき B R I C s 経済研究所作成

(B R I C sと同じ成長エンジンを備える「V I S T A」)

「V I S T A」は、現在のB R I C sの高成長を支える5つの条件を基準として、5つの条件のうち4つ以上を備えている有力新興国から選定している。

5つの条件とは、豊富な天然資源、労働力の増加、外資の導入、政情の安定、そして購買力のある中産階級の台頭である(図表2)。

第1の条件である豊富な天然資源については、広大な国土を持つV I S T A各国で次のような天然資源が産出する(図表3)。高度成長期の入り口に立ったV I S T A各国は、大量の資源・エネルギーを消費するため、必要な資源の多くが自国内でまかなえることの意義は大きい。

図表2 B R I C sの高成長を支える5つのエンジン

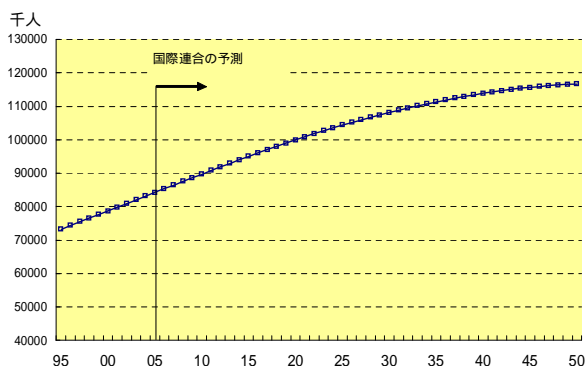
(出所) B R I C s 経済研究所作成

図表3 V I S T Aで産出する天然資源

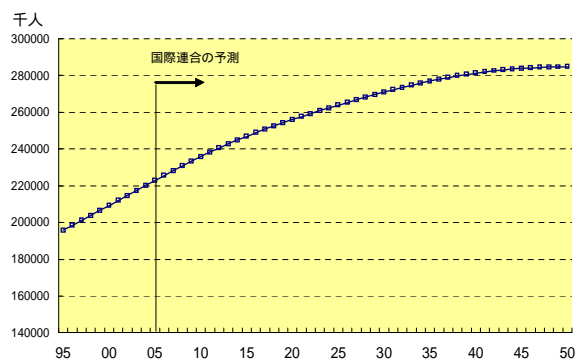
| | |
|--------|----------------------------|
| ベトナム | 原油、石炭、金、天然ガスなど |
| インドネシア | 金、スズ、石炭、天然ガス、銅、ニッケルなど |
| 南アフリカ | ダイヤモンド、プラチナ、金、鉄鉱石、クロムなど |
| トルコ | 石炭、クロム、鉄、銅、ボーキサイト、大理石、硫黄など |
| アルゼンチン | 鉄、銅、金、ウランなど |

(出所) 各国統計に基づき B R I C s 経済研究所作成

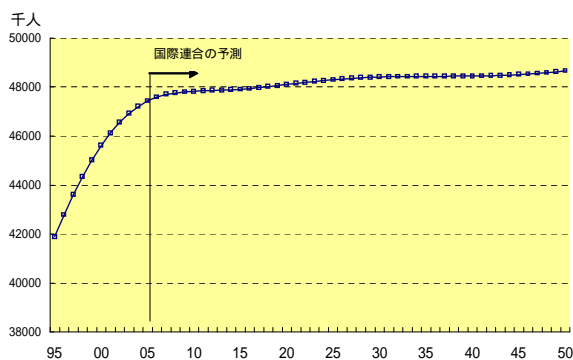
図表4 ベトナムの将来人口



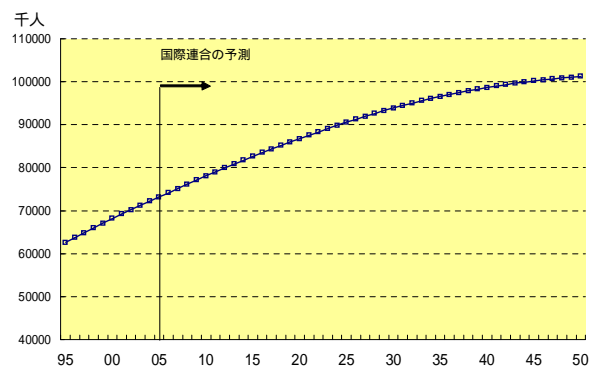
図表5 インドネシアの将来人口



図表6 南アフリカの将来人口

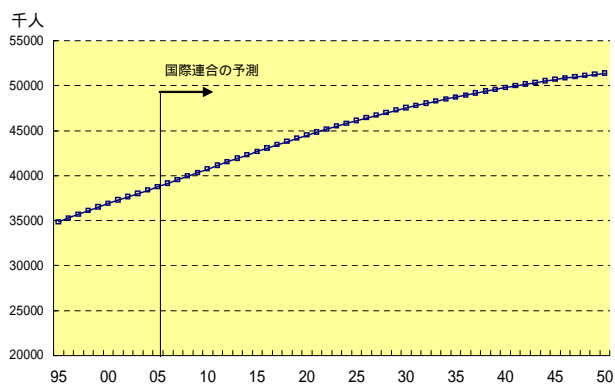


図表7 トルコの将来人口

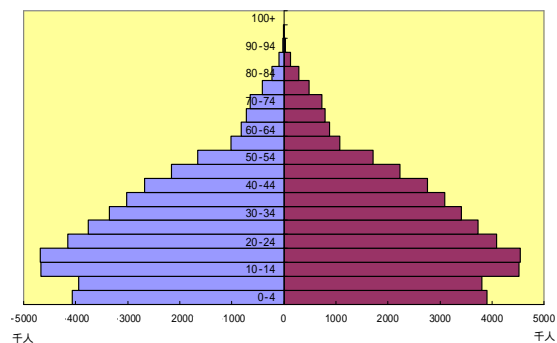


(出所) 国際連合資料より作成

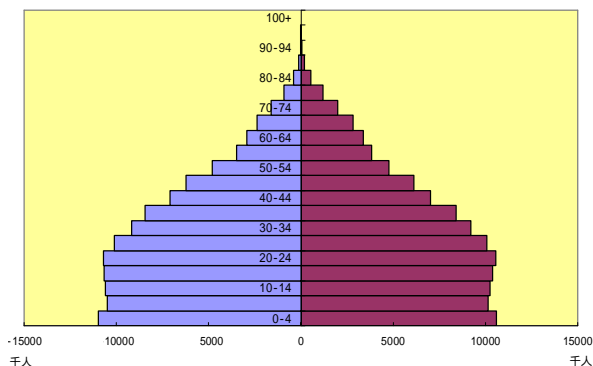
図表8 アルゼンチンの将来人口



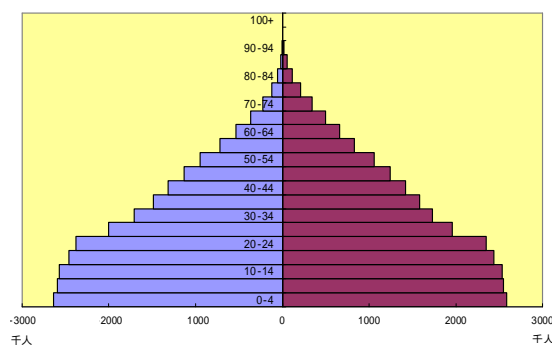
図表9 ベトナムの人口ピラミッド(05年)



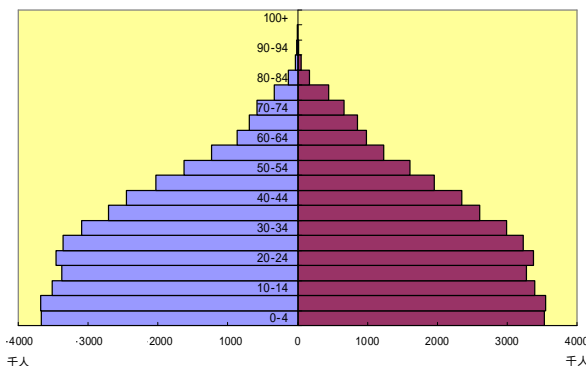
図表10 インドネシアの人口ピラミッド(05年)



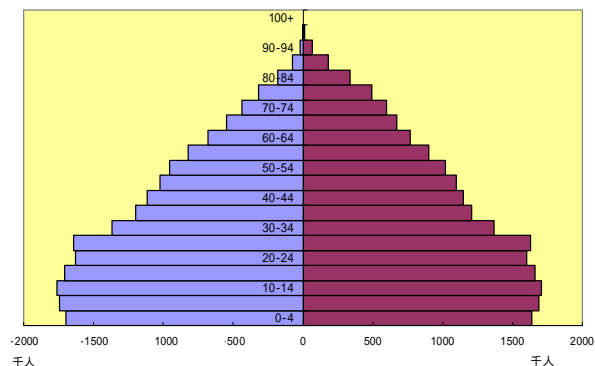
図表11 南アフリカの人口ピラミッド(05年)



図表12 トルコの人口ピラミッド(05年)



図表13 アルゼンチンの人口ピラミッド(05年)



(出所) 国際連合資料より作成

次に、第2の条件である労働力人口の増加についてみると、V S I T Aは2005年現在約4億6639万人の人口を抱えており(ベトナムが約8424万人、インドネシアが約2億2278万人、南アフリカが約4743万人、トルコが約7319万人、アルゼンチンが約3875万人)、各国とも毎年増加傾向にある。2000年から2005年にかけてのV I S T Aの人口増加率は年率+1.2%だ。国際連合の推計によれば、V I S T Aの人口規模は、2050年には6億254万人の水準に達する見込みとなっている(図表4～図表8)。もっとも、いくら人口が多くても、働き手となる生産年齢人口(15～64歳)の割合が低ければ、経済成長にとって必要な労働の供給はままならず、生産水準や人々の所得水準は高まっていけない。その点、V I S T AはB R I C sと同様、人口のボリュームが多いだけでなく、経済成長のカギを握る若年人口の割合が高いという有利な特徴を備えている。実際、V S I T A各国の人口ピラミッドをみると(図表9～図表13)、出生率が高いことなどを背景に土台のしっかりした美しいピラミッド型になっていることが分かる。これは、若年人口が豊富で、将来良質な労働力が大量に供給されることを示唆する。

第3の条件については、各国とも道路、空港、電力などの基本的なインフラを整備しつつ、外資を

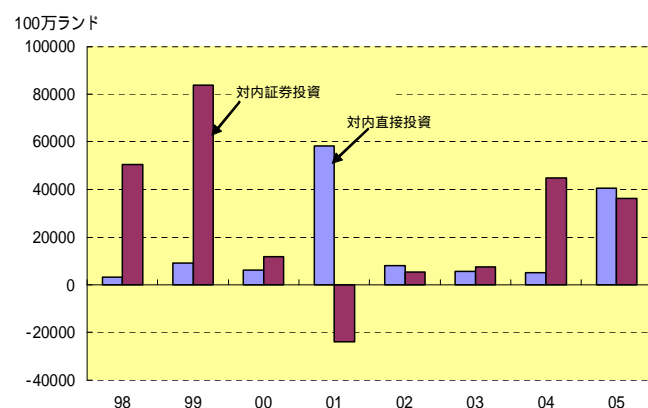
積極的に導入している。たとえば、南アフリカでは対内直接投資が急増しており、2005年の対内直接投資額は404億8800万ランドと、2004年の51億5500万ランドの約8倍の規模に達した(図表14)。また、ベトナムでは、2005年の対内直接投資額が42.68億ドルに達し、2004年実績(22.22億ドル)の1.92倍となった(図表15)。

第4の条件についても、インドネシアを除けば、各国とも政情が安定している。

さらに、第5の条件についても、各国で購買力のある中産階級が台頭しており、個人消費が大幅に伸びている。2005年の実質個人消費は、ベトナムが前年比+7.5%、インドネシアが同+4.0%、南アフリカが同+6.9%、トルコが同+8.8%、アルゼンチンが同+8.9%を記録した(図表16)。

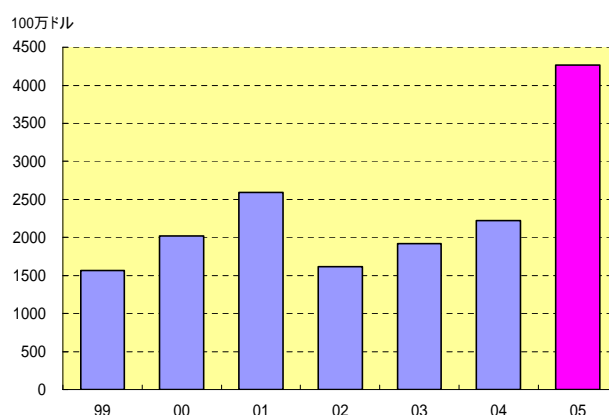
なお、「V I S T A」の選定にあたっては、地政学的なリスク分散も考慮して、アフリカ(南アフリカ)、南米(アルゼンチン)、中東(トルコ)、東南アジア(ベトナム、インドネシア)からバランスよく候補国を選んでいる。

図表14 南アフリカへの直接投資額



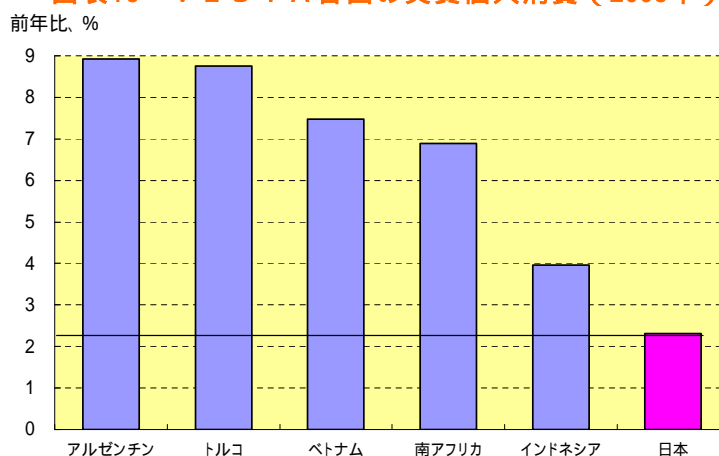
(出所) 南アフリカ準備銀行資料

図表15 ベトナムへの直接投資額



(出所) ベトナム国家銀行資料

図表16 V I S T A 各国の実質個人消費(2005年)



(出所) 各国統計より作成

(V I S T A各国の概況)

以下では、V I S T A各国の経済の概況を簡単に紹介しておこう。

まず、ベトナムは、「チャイナ・プラスワン」として注目を浴びている。経済発展に伴い、中国沿岸部の人件費が上昇してきたため、チャイナ・リスクの分散先として、安価な労働力が豊富に供給できるベトナムに進出する外国企業が増えてきた。ベトナムがW T Oに正式加盟し、法制度の透明性が増したことで、今後外国企業のベトナムへの進出が加速する可能性が高い。近年では、市場原理導入を柱とするドイモイ(刷新)政策が加速しており、その効果によって高成長が支えられているという側面もある。

次に、インドネシアは、豊かな天然資源、若年労働力の増加、中産階級の台頭などいくつかの有利な条件を備えている。同国については、すでに95年の段階で、経済協力開発機構(O E C D)がB R I C sと同列で将来の経済大国になることを予測していたが、97年7月の通貨危機の発生により、B R I C s経済の後塵を拝することになった。

南アフリカは、金やダイヤモンド、プラチナ、クロムといった鉱物資源が豊富で、資源輸出によって高成長を実現している。また、近年では人口の7割を占める黒人のなかから中産階級が台頭しつつあり、個人消費も盛り上がってきた。さらに南アは、2010年のサッカー・ワールド・カップの開催国であるため、鉄道や道路といった各種のインフラ整備も積極的に推進している。

トルコは、2000年から2001年にかけて、2度の金融危機に直面したが、緊縮財政などその後の構造改革が奏功して、高成長路線へとシフトした。2001年には50%を超えていたインフレ率も、通貨価値の下落に歯止めがかかったことなどから落ち着きを取り戻しつつある。中長期的な視点からみて、トルコ経済の高成長を支える要因としてはE Uへの加盟を挙げることができる。トルコは2005年10月からE Uへの加盟交渉を開始した。E U加盟実現までにはかなり長い年月を要するとみられるが、E U加盟に向けての改革が進捗していけば、法制度などの透明性が増し、海外からの投資が大幅に増加、外資導入をテコにした高成長が可能になる。

最後にアルゼンチン経済は、2003年以降急回復しており、2005年の実質G D Pは前年比+9.2%と、2004年の同+9.0%からさらに加速した。輸出はメルコスール(南米南部共同市場)向けを中心に好調を持続しており、2006年入り後も前年比2桁の伸びとなっている。アルゼンチン経済は、景気が回復基調で推移するなか、2006年・2007年も7%から8%の高い成長率を持続するとみられる。

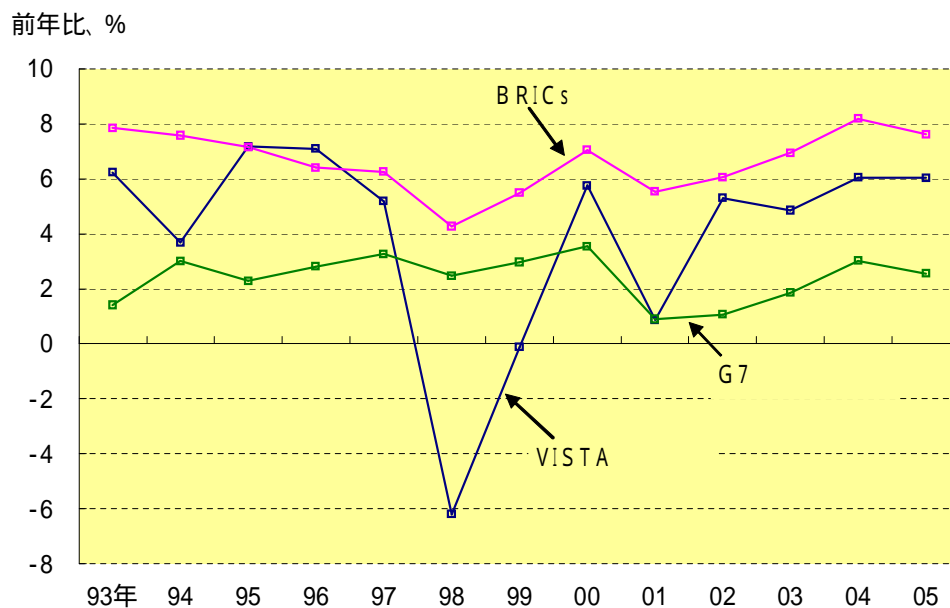
(中長期的に経済規模は大きく拡大)

V I S T Aの2005年の加重平均成長率は+6.0%で、G 7の+2.6%を大きく上回る(図表17)。

V I S T AはB R I C sと比べると経済規模がまだまだ小さく(2005年のドル換算名目G D PはB R I C sの4.6兆ドルに対してV I S T Aは9600億ドルと4分の1程度)、個別にみるとインフレや経常収支の赤字など解決すべき課題もあるが、エマージング諸国のなかでは将来の高成長が最も期待できるグループであることに間違いはない。

試みに、いくつかの前提条件をおいたうえで、V I S T AのG D Pが将来的にどのように推移していくかシミュレーションしてみよう。

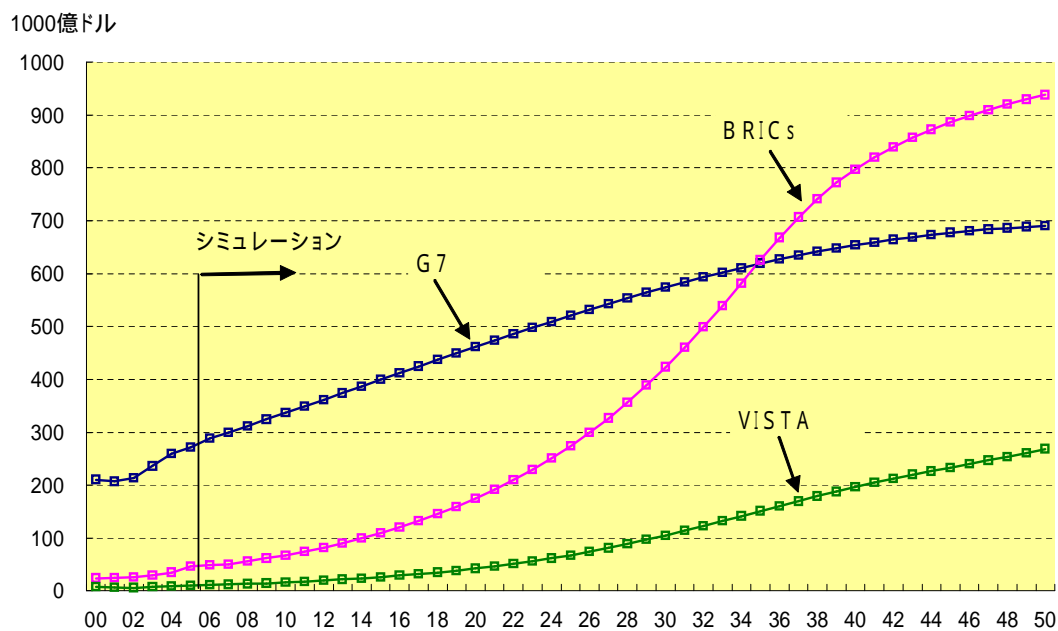
図表17 B R I C s、V I S T A、G 7の加重平均成長率



(出所) 各国統計より作成

(注) 加重平均成長率は2000年のドル換算名目GDPをウエイトにして算出

図表18 B R I C s、V I S T A、G 7の名目GDPの推移



(注) シミュレーションはB R I C s 経済研究所

(出所) 各国統計より作成

ここでのGDPの大きさは米ドルで換算した名目ベースで評価することとし、人口が国際連合の推計人口(中位予測値)に沿って推移していく、各国の1人あたりGDPがロジスティック曲線に沿って推移していく(水準が低い段階では成長率が逓増し、水準が高くなると成長率が逓減する)、予測期間中にアジア通貨危機のような外生的なショックは発生しないことを前提とする。

シミュレーションの結果は、図表18に示したとおり。これによるとVISTAの経済規模は2005年時点で9600億ドルにとどまっている。しかし、今後成長率が加速度的に高まり、2050年には26.8兆ドルに達する。2005年から2050年までの間にVISTAの経済規模は28倍に膨らむ計算だ。

日本の企業や個人投資家は、中長期的に高い成長が見込まれる有望市場「VISTA」に目を向けてもいいのではないか。

以上